

意味・言語行為・言語生活

永野賢

この領域の研究業績は、他の領域に比べるとまだやはり少ない。しかし、開拓の余地のおおにある領域だけに、新しい試みがいくつかなされた。

単行本でまずあげるべきは、嵯島忠夫『表現論』(綜芸舎、昭38・9)である。これは、人間の言語行動そのものの機構と、言語行動の結果として生みだされる言語事実の形態と機能を明らかにしようとしたものである。単なる観念的な言語過程の、いわゆる言語哲學的分析でもなく、また、単なるパロールの分析のみにとどまるものでもなく、言語表現の当事者がいかにしてパロールを実現させるかという、人間の行動のメカニズムの分析から、パロールとしての言語事実の形態と機能を説明しようとしたものであり、さらにそこから、ラングとしての言語体系に対する新しい見方を得ることも期待されている。人間の行為としての言語表現の機構を明らかにするために、表現特性・对人的場面・表現の標準化などの仮説が立てられ、また、ワクづけ、敘述の態度、提示・所遇・待遇の態度、離散・系列など、新しい概念による説明がなされている。とくに、言語行動におけるコントロールの概念、冗文度の概念、開いた表現・閉じた表現の概念などは、国語表現の諸現象を説明するための、実り多い収穫である。基底に数理的な考え方があって、説明の体系を支えていることは、著者の計量国語学的研究歴の当然の所産ということができよう。

次に、鈴木孝夫『A Semantic Analysis of Present-day Japanese』

(慶応義塾大学言語文化研究所・昭38・12)があり、日本語の意味論的研究の新しい路線を指向した労作として注目される。欧米の言語学者には、音声言語こそ原本的な言語の形態であって、文字言語は言語ではないという観念がある。たとえば、Bloembergenなどは、日本語は三種ないし四種の書記体系をもっているが、言語は一つだといった考え方をしている。しかし、これは重大な誤りである。現代日本語において、vocal codesはgraphic codesに非常に依存している、と著者は見る。すなわち、日本語および日本人の言語行動においては、漢字というものが意味を支える役わりをしている、漢字を離れて日本語を考えることはできないというわけである。この問題を、漢語の同音語、漢字の音訓、漢語と和語との対比などの観点から、意味論の問題として分析してみせたのが本書である。著者自身もいうように、今後さらに語史的な観察も必要であろうが、ともかく日本語の特性に根ざす意味論研究の新しい分野を開拓したのも、このように、今後さらに語史的な観察も必要であろうが、ともかく日本語の特性に根ざす意味論研究の新しい分野を開拓したのも、おそらくそこにあるということができよう。

なお、鈴木この考えは、シンボジウム「これからの国語学」(昭38・5・25、立教大学において)の席上、「意味論」として提出され、国語学者の関心をひいた。(『国語学』54、昭38・9)

さて、国語学者による意味の分野の研究論文としては、語感に関するものがいくつかある。

西尾寅弥「語感をさぐる」(『言語生活』131、昭37・8)は、知的な意味に関しては相当に似ていると考えられる語どうしを比較対照してみても、それらの間に存する語感上の差異を捕えるという接近のしかたをしたものである。語感の差異は、日本語の語彙体系を、類義語・同義語により二重三重ならしめる要因として重要な研究課題であるといえるが、西尾は調査法・研究法に新しい試みをしている。「ことばのイメージとSD法」(『計量国語学』24、昭38・3)もその一つである。類義語の語感を意味微分法で捕えようとしたもので、西尾のこの試みは、語の意味の感情的側面をSD法で捕えることの可能性を示唆したものである。

『言語生活』134(昭37・11)は「語感」の特集で、金田一春彦「語感の正体」、佐藤信夫「語感について」その他が収められている。金田一のは語感発生の原因を主として論じたものである。佐藤は、意味と語感とはほとんど別のものでなく、語にそなわっている効力のうち本質的なものが意味、非本質的なものが語感であり、語感とはいわば残余である。しかし、実際にことばの使われる場面(文脈・コンテキスト)ではこの残余が意味本体以上に重要な役わりを果たす、と述べている。具体例よりも基礎論として興味深い。

中作恭子・芳賀純「SD法による童話中の主要人物の意味把握の変化の分析」(『計量国語学』25、昭38・6)は、小学生が童話中の主要人物をどうとらえているかを、段落の進展ごとの変化としてSD法で追跡したものである。オスグッドの考案による意味微分法も心理学の分野にとどまらず、国語学の領域の研究としても具体的な成果に結びつくことが今後一層期待される。

梅本堯夫「言語学習及び言語行動の分析に於ける連想法の位置」(『京都大学教育学部紀要』9、昭38・3)は、心理学の分野のものであるが、連想法という、SD法とはちがった成果の期待される方法として参考にすべきものが含まれている。語彙体系の研究における意味分類には、語義そのものでなく、語感的な因子による方法もなされてしかるべきであり、その意味ではこういった連想法とかSD法などが、国語学の方法として活用されるおもしろい。

鈴木孝夫「音韻交替と意義分化の関係について」(『言語研究』42、昭37・10)は、音韻と意味との関係を心理的な表現価値の対立という事象の上でとらえようとした、音韻のレベルでの意味論である。価値の問題については、高橋太郎「ことばの価値と価値意識」(『講座現代語』1、昭38・12)がある。言語の価値、発言の価値、言語活動そのものの価値、と三つに分けて論じている。

場面に關しては、倉又浩一「意味『場』の理念及び意味『場』分析の技法について」(『言語学論叢』3、昭37・12)、塚原鉄雄「場面とことば」(『講座現代語』1、昭38・12)、鈴木英夫「誤解」(『東大国語研究室』1、昭38・1)などが一読に値する。

『英語青年』109-3(昭38・3)では、「意味」の意味」という特集をしており、石橋幸太郎「意味の意味」について(オグデン)とリチャーズのうち、リチャーズのその後の研究の展開の紹介)、山口秀夫「意味論の『意味』」、空西哲郎「文法の扱『意味』」、郡司利男「構造言語学と意味」(構造言語学は意味を無視するというのは素人の風説的疑惑にすぎない)、川崎寿彦「詩の『意味』」、橋口稔「翻訳における意味」などが収められている。

以上のほか、言語学・心理学・教育学などの畑での文献で、意味に關する問題を扱ったものを、管見に入った限りで列挙しておく。

山元一郎「記号と象徴——あるいはコトバの明るさと深さについて

て——」(『立命館文学』200、昭37・2)(マリノウスキー、オグデ
ン、リチャーズの意味論・家徴論にふれつつ、パースの記号学を論
じたもの)、大東百合子「J. R. Firthの学说——特に「context of
situation」を、Prosodic analysis」(『こころ——』(『言語研究』41、
昭37・3)、宇佐美寛「認識における概念と比喩の論理——教育に
おける意味論——」(『東京教育大教育学部紀要』8、昭37・3)(言
語による意味の定着と思考の発展)、滝沢武久「思考における言葉
の役割」(『言語生活』128、昭37・5)(言葉覚えることによる思
考が質的に変化する)、小笠原林樹「言語と言語研究における「形
と意味」」(『言語学論叢』4、昭38・2)(Transformationの理論
において意味をどう考えるか)、大坪一夫「語意味の記述について
の試論」(『言語学論叢』4、昭38・2)(語意味は類の意味の束と
して記述できる)、守屋慶子「行動統制に果すことばの役割——幼
児期を対象としたソヴェトでの研究より」(『立命館文学』215、昭38
・5)(ルリヤ他の実験の紹介)

○
言語行為に関する分野の研究では、まず、計量国語学者による
「方略」(または「方策」)の論があげられる。榑島忠夫「言語行
動の確率論的考察」(『計量国語学』19・20、昭37・3)、水谷静夫
「Outline of a theory of verbal communication process」(『計量国語
学』21、昭37・6)、水谷「言語通信過程論と決定理論」(『計量国
語学』22、昭37・9)、水谷「言語受容主体の方略」(『国語国文』
31—11、昭37・11)、榑島「言語行動の方略」(『言語生活』137、昭38・
2)、水谷「表現内容が二種の時の言語行為の方略」(『計量国語学』
24、昭38・3)などである。

方略とは、言語行動における表現選択や受容態度のとり方のこと
であり、正しい伝達や効果的なコミュニケーションを成就するため

の送り手と受け手との方策である。このような言語行為の過程を確
率論的に分析するのが方略論の目的であるようであるが、経験や直
観や感情に基づく言語行動を数量的に分解結合するというこの行き
方は、モデルとしてのおもしろさはあるにしても、言語行動一般を
通じての本質を射あてることができる方法なのかどうか、不敏なわ
たしには充分には理解できない。

次にあげべきは、言語工学の進展であろう。電子計算機は社会
一般にますます利用の幅を広くしているが、言語の世界にもいよ
よ利用の可能性を大きくしてきた。国語学者が電子計算機を使いこ
なすことができるようになれば、国語研究の過程にもどしどし採り
いれられることになるであろうが、いまのところは、研究に利用す
るということではなく、人間の言語行動を電子計算機に代行させる
という目的の研究が進められているわけである。その意味で、言語
工学は言語行為の領域に属する。

文献としては、松本昭・榑山睦子「電子計算機に文を作らせる」
(『言語生活』137、昭38・2)、水谷静夫「抄録を作る機械」(『言語
生活』137、昭38・2)、水谷「統計的自動抄録法の問題点」(『計量
国語学』27、昭38・12)、榑山睦子「電子計算機による分ち書き」
(『計量国語学』24、昭38・3)、金子隆芳・大坪一夫「多義語と文
章論的分析——言語の自動翻訳のための小論——」(『計量国語学』
19・20、昭37・3)、和田弘「機械翻訳の可能性」(『数学セミナー』
2—4、昭38・4)、田町常夫「中間語を介する機械翻訳——逐語
訳から質のよい翻訳へ」(『自然』18—10、昭38・10)などがある。
機械にかけるという目的のために、日本語の構造が新しい角度から
観察・分析されることになるわけで、国語学じたいにとっても、取
穫をもたらすと思われる。

なお、関英男「機械による音声言語の記録・再生について」(『言
語生活』132、昭37・9)は、音声タイプライター・速記用タイブラ

イターについての研究の現状を略述したものである。

コミュニケーションの問題については、鈴木英夫「非言語的 (Non-verbal) コミュニケーションと国語学」(『東大国語研究室』2、昭38・10) (音声言語における非言語的コミュニケーションの役わりを強調し、非言語的コミュニケーションも国語学の研究対象となる) がある。非言語的コミュニケーションに関しては、望月衛「話しコトバについて」、世良正利「日本人におけるコミュニケーションの諸問題」(ともに『年報社会心理学』3、昭37・10) にも述べられている。ほかに、宮地裕「話しことばと書きことば」(『講座現代語』1、昭38・12) (伝達構造とジャンルの相関図式)、藤永保「コミュニケーションとことば」(『講座現代語』1、昭38・12)、大久保忠利「日本のコトバと文字の矛盾」(『年報社会心理学』3、昭37・10) (どの文字を書いたらいいかがわかったとしても、ことばがわかったという水準がどの程度かが問題だ) などがあ
る。

○

言語生活の分野では、シンポジウム「これからの国語学」(前出)での、池上植造「近代語について」、柴田武「『言語生活』について」が、まずあげられる。池上は、近代語研究の文献資料をパロールとして考えれば、それがいかにして残されたかというところから言語生活という問題が出てくる、と論じた。柴田は、自身の手がけた調査を例証としつつ、記述的研究と社会的研究とに分けて、記号・行動・生活の領域を図式化して示した。言語生活の問題が、国語学の研究対象にはいるかはいらないかは、観念論としてでなく、具体的な国語現象の究明とともに、解決されていくべきものである。

理論としては、時枝誠記「現代語と現代の言語生活」(『講座現代

語』1、昭38・12) (言語行為と言語生活という持論) があり、実際調査としては、「国民各層の言語生活の実態調査」がある。この調査は、国立国語研究所によって、「国民各層がどのような言語生活を営んでいるか、どのような問題を持ち、どのような意識をもっているか」を、新潟県長岡市の市民と、全国の大学生とについて調べた(昭和37年度) ものである。市民調査については、38年10月に現地長岡で報告会が行なわれ、永野賢・高橋太郎が講演した。大学生調査については「国立国語研究所年報14」(昭38・10) にあ
らましが報告されている。

長野県短期大学地域社会文化研究会『農山村の児童、生徒をめぐる生活環境調査——言語編——』(刊記ナシ、予備調査は昭36年、本調査37年) は、国語研究所の白河・鶴岡調査をモデルとして、農山村児童の言語の共通語化の要因を調べたものである。

ほかに、宮地裕・松本昭「家庭での言語生活の実情」、植地南郎「テレビの家庭ことばへの影響」、田中章夫「家族への手紙」、渡辺友左「家族の呼び方」(以上いずれも『言語生活』143、昭38・8の特集「わが家のことば」に載ったもので、四編ともアンケートによる調査報告)、野元菊雄「年令によることばのちがいが」、寿岳章子「男性語と女性語」、林四郎「職業語・階層語・専門語」(いずれも『国文学』8・12、昭38、1)、村井長正「宮中のことば」(『学苑』276、昭37・12) などがある。村井のは、東宮傅育官としての同氏の体験と、現女官山口富子・久保八重子両氏の談話とにより宮中ことばを紹介したもので、学術的なものではないが、記録として珍しい価値がある。

言語生活に関係の深いものとして、NHKによる国民生活時間調査(昭35秋・36夏にかけて全国十七万人を対象に行なわれた) がある。放送番組の企画編成の基礎資料を得るのが目的の調査であるが、国民の一日の生活行動がどのように行なわれているかの実態が

つかめるわけで、かつて国語研究所で実施された二十四時間調査などと比較してみると、参考になるところが多いと思われる。文献、『国民生活時間調査・資料編Ⅰ～Ⅳ』（NHK放送文化研究所、昭37・3～6）、『国民生活時間調査・縮刷版』（同上、昭37・8）、『日本人の生活時間』（日本放送出版協会、昭38・3）、中西尚道「国民生活時間調査の分析(1)」（『NHK文研月報』12―8）12、昭37・8～12）、中西「日本人の生活時間の変化——昭和16年調査と昭和35年調査の比較——」（『NHK放送文化研究所年報』8、昭38・6）など。同種の調査に、池内一・岡部慶三・竹内郁郎・藤竹暁・岡田直之「東京都民の生活時間と生活意識」（『東京大学新聞研究所紀要』10、10―2、昭37・3）がある。

『国文学』7―2（昭37・1）の特集「マスコミと言語生活」には、熊沢竜「言語生活と言葉と国語」、林大「近代社会の進展と言語生活」、植地南郎「耳で聞く文章」、大石初太郎「集団思考をめぐって」、大塚憲一「通信教育生とその言語生活」その他が含まれている。

マス・コミ関係では、後藤丙午「社会生活とマス・メディア」（『新聞研究』139、昭38・2）が、第二次新聞総合調査の中間報告であり、メディアへの接近状況と接近動機についてのデータがある。ほかに、三樹精吉「見出しの意義の変化について」（『新聞研究』127、昭37・2）、番組研究部用語研究室「テレビニュースの言語表現に関する研究」（NHK放送文化研究所年報8、昭38・6）など。表現法に関しては、いわゆるハウ・ツーものは除外するとして、解説書ではあるが、芳賀綏「国語表現教室」（東京堂、昭37・9）、芳賀「自己表現術」（光文社、昭38・5）、波多野完治「実用文の書き方」（光文社、昭37・6）などは、研究書としての価値もある。

最後に、雑誌『言語生活』の本期における特集題目のうち、この項に關係の深いものを列記すると、（既出は省く）、昭37年1月「こ

とわざの運命」、3月「落書き」、4月「解説時代」、7月「ことばによらない思考」、12月「職場の外国語」、38年2月「言語工学」、3月「名づけの心理」、5月「禁じられたことば」、9月「誤解と曲解」。

なお、「表現学会」が結成され、昭和38年12月1日に、発起人会ならびに発会式が名古屋市金城学院大学で行なわれた。39年度から研究発表会などの活動がすすめられるはずであり、発展が期待される。（本部、広島大学文学部国語学研究室。事務局、金城学院大学文学部国文研究室）

以上、「展望」というよりは、簡単な紹介をつけた文献の羅列といふことになってしまったし、また、不勉強のための見落としがあるかもしれないことを申しわけなく思う次第である。ただ、これだけのものに目を通しながら感じたことを一言述べておきたい。それは、概して、国語学者やジャーナリストの書いた文章は比較的読みやすく、心理学者や教育学者の文章は比較的読みにくいということである。それは必ずしも術語やテーマによるのではなく、文章の叙述そのものによるように、わたくしには思われた。いろいろなものをかためて読むという機会が与えられ、体験を通して味わった実感である。はからずも、担当の領域における実際問題にぶつかったわけで、一つの研究課題であろうと痛感した。

—— 国立国語研究所員 ——